

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330193

研究課題名（和文） 高校生文化と進路形成の変容（第3次調査）単線型教育体系における多様化政策の課題

研究課題名（英文） Reconsidering the paradigm of the meritocratic single-track educational system—International Comparative Study on High School Student subculture

研究代表者

樋田 大二郎（HIDA DAIJIROU）

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：80181098

研究成果の概要（和文）：実証研究の結果、日本の高校では確かにゆとりから学力回帰の流れが起きており、学力向上のためには、かつてのメリトクラシーとトラッキングの組み合わせによる構造に起因する動機付けでは無く、また内発的動機付けに期待する多様化の制度改革も一段落して、今日では学校生活の楽しさと個別的面倒見主義による動機付けが強調され、あるいはそれを支える新自由主義的競争原理の導入などが進行していた。しかし、そうした動向は主体性や創造性などの従来からの教育的価値を損なう危険を秘めていた。研究グループは、シンガポールとの国際比較研究から、代案として複線型教育体系もしくはその要素の一部を日本に導入することを検討した。

研究成果の概要（英文）：Our empirical research result shows that the student's motivation was stimulated by the structural power, meritocracy and tracking system three decades ago and by intrinsic reward, interest and concern a decade ago. Nowadays students are not stimulated to study but encouraged to adapt to the everyday school life by teacher's care, intensive individualized encouragement while the scholastic ability again is being put more emphasis on pushing aside "pressure-free education" in Japan.

Teachers are forced to do so by neo liberalism. Such a tendency may impair traditional educational values including developing creativity and independence. We examined the advantages of introducing the multi-track education system into secondary education instead of strengthening teacher's care.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
2010年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2011年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	14,200,000	4,260,000	18,460,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：高校、生徒文化、進路形成、メリトクラシー、トラッキング、多様化、複線型教育体系、新自由主義

1. 研究開始当初の背景

われわれ生徒文化研究会は、1979年～80年に第1回、1997年～1999年に第2回、そして2009年～2011年に第3回の高校調査を実施した。第1回調査の時点では、高校はとりあえず良いところとされ、高校適応を高める方法を検討することが調査の課題であった。第1回調査では、日本の高校教育システムを支えているのはメリトクラシーとトラッキング・システムであること、しかしそうした構造的な要因だけでなく、各高校の教育指導の特徴が各高校独特の生徒文化を形成し、生徒の学校適応や進路形成に強く影響していることを明らかにした。第2回調査の時点では多様化と個性重視の潮流が渦巻き、日本の高校教育を統制し特徴付けていたメリトクラシー規範とトラッキング・システムが弛緩しつつあることが明らかになった。また、青年文化が優勢となり生徒文化に強く影響していた。高校は生徒の多様なニーズにこたえるための様々な制度改革を行っているほか、生徒の内面にまで踏み込んだ教育で高校適応を高めようとしていた。近年、メリトクラシー規範とトラッキング・システムがさらに弛緩した。それだけでなく従来は高校外に当たり前のよう存在していた高校を支える教育基盤の喪失が起きている。中学時までの基礎学力、家庭での学習習慣、そしてもう一つは地域と家庭での3C（ケア、関心、結びつき care, concern, connection）（マーティン 2007）の喪失である。これに加えて高校教育の困難化に拍車をかける政策的な変動が起きた。新自由主義的な潮流が優勢となり教育の質保証という名前で競争原理の導入が進行して従来の学校教育的なものがつぎつぎと否定されていた。

しかしこうした困難化の中であってなお、保護者と教育委員会の要請に応じて、高校は学力向上に向かわざるを得ない。多くの高校が自然な帰結として「個別主義的な面倒見主義」（樋田 2010）による教育に向かっている。手を掛けすぎていることへの疑問を感じながら、高校は多様化した生徒に個別的に寄り添って学習を奨励する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、単線型高校教育体系下の、高校教育多様化の課題を検討することである。単線型教育体系の見直しを含めて、日本の高校教育の多様化政策を評価し、生徒と社会の多様化要求への対応を根本から検討することである。

多様化をめぐる高校のカリキュラム改革・制度改革の歴史は1977年に始まる。この年、都道府県教育長会協議会高校問題プロジェクトチームが「高等学校教育の諸問題と

改善の方向」を報告し、単位制高等学校、中高一貫六年制高等学校の設置など、その後の高校改革を方向付ける提言を行った。翌1978年には「ゆとりのカリキュラム」の学習指導要領が告示され、1980年代半ばには臨教審（84年～87年）が個性重視と多様化を提言した。これらが制度改革とカリキュラム改革を方向付けて、1990年代以降のカリキュラム改革や多様化・総合化の高校制度改革が本格的に推進された。

これらの提言やそれに続く改革の背景には、受験圧力の加熱化、国際化、情報化、そして高校生徒数の増加（1989年にピークを迎え562万人、2010年には337万人）などの環境変化への対応の必要があった。

その後の展開を見ると、2000年前後には学力低下が問題となり、実践レベルでの学力向上対策が盛んに行われるようになった。やがて学力低下問題は教育格差問題へと争点が拡大し、近年では貧困の再生産が論じられるようになり、家庭（学習）への働き掛けが積極的に行われるようになった。

高校制度改革、特に多様化の制度改革は一段落したと言われている。そうした中で受験対策・学力向上をはかるために、多くの高校が自然な帰結として「個別主義的な面倒見主義」に向かっている。手を掛けすぎていることへの疑問を感じながら、高校は多様化した生徒に個別的に寄り添って学習を奨励する。

われわれが教育体系にまで踏み込んで高校教育を再考しようとしたのは手を掛けすぎないとやっていけないような状況に対して、分岐型教育体系によって制度的に対応する可能性を検討するためである。

3. 研究の方法

本研究で用いるデータは生徒文化研究会が実施した過去2回の調査（1979年、1998年～2000年）で得られたデータおよび、今回の助成で実施した調査のデータである。対象とした国及び地域は、日本（2009年～2011年実査）及びシンガポール（2011年実査）であり、国内では東日本のA県・B県を対象とした。今回調査の概要は以下の通りである。

(1) 日本調査

生徒対象質問紙調査は2009年11月～2010年3月に実施。各校2年生4クラスに対する質問紙調査。教室での集団自記式。教師対象質問紙調査は2009年11～2010年3月に実施。サンプル数は3974名。生徒調査対象校全校で全専任教師を対象に実施。サンプル数は1191名。職員室での配布・回収。

(2) シンガポール調査 JC (Junior

College: 日本の普通科高校にあたる) 2校、ITE1校を対象に教師と生徒に対する質問紙調査（2011年5～6月）および、訪問聞き取

り調査・資料収集（2010年3月・2012年2月）を行った。生徒調査のサンプル数は、JC1:352名、JC2:344名、ITE:934名で教団での集団自記式。教師調査のサンプル数はJC1:111名、JC2:107名、ITE:217名。

4. 研究成果

【日本の高校生の時系列比較】

まず、研究の前提となる、生徒の時系列の変化を示す。

(1) 1979年には高校生の平均学習時間は94.0分であった。ところが、学力低下が問題にされる直前の1997年には、60.6分へと30分以上減少している。しかし、学びのすすめ以降の教育実践改革・学力向上対策が取られた後の今回調査（2009年）ではV字回復の兆しを示して66.9分となっている。

(2) 学校生活適応度もV字回復した。高校生の学校生活への適応度は学習時間の増減に合わせて、1997年に一度落ち込んだあと、今回、V字回復を果たした。この学校での生活には「あいたいを感じる」が79年→97年→09年の順（以降同じ順）に45.6%→31.0%→47.8%となり、09年には79年水準よりもわずかであるが高い値になっている。同じことが「この学校の生徒であることは誇りである」（51.4%→36.9%→54.2%）や「学校生活は楽しい」（73.5%→58.8%→78.4%）でも起きている。現在の高校生は30年間でもっとも学校適応的である。しかも、97年から09年にかけて先生への感情についても「先生に親しみを感じる」（34.7%→31.5%→49.1%）が97年から09年にかけて大幅に上昇した。アンケート調査と平行して行ったインタビュー調査で教師の生徒への個別対応の姿勢・共感的な姿勢・寄り添おうとする姿勢などが明らかになっている。それらが教師と生徒の関係を親しみのあるものになっている。

(3) 授業の姿勢は右肩上がりに肯定的になった。「先生の授業を熱心に聞いているほうだ」（37.3%→47.5%→67.6%）が79年から97年にかけて10ポイント、さらに97年から09年にかけて20ポイント上昇し、合計30ポイント上昇している。

(4) 競争する準備は整っている

競争原理による学習の奨励は、外的報酬の操作の要素が大きい。近年、学校教育が内発的動機付け（不思議だから、楽しいからなど）や内的報酬の操作（自尊心、達成感など）への関心を弱め外的報酬に関心を寄せつつある。ただし、外的報酬の操作を行うためには、競争が妥当・公正であると認識されている必要がある。競争が妥当で、公正が保証されて

いることが競争の条件である。高校生は競争についてどのように見ているだろうか。「努力すれば、だれでもよい成績をとることができる」（89.6%→80.1%→81.9%）が3回の調査を通じて8割台を保持しており、競争が公正であると考えている。また、妥当性については、結果の受入についての質問で「勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損をするのはしかたないことだ」（59.5%→57.9%→74.2%）が97年から09年にかけておよそ15ポイント上昇した。高校生は外的報酬の操作による動機付けの準備ができています。

(5) 生徒の学校への依存傾向が増加した。

最後に30年のスパンで見たときに浮かび上がる高校教育の課題を2つ指摘する。

まず、生徒の依存化の傾向がある。教師インタビュー調査では、異口同音に「高校生がおとなしくなった」、「従順になった」、「ひ弱になった」と心配していた。そして、教師は心配しつつも学校適応や受験対策のためには、勉強の仕方から心のケアまで手をかけざるを得ないと苦悩していた。生徒の規範意識は、コールバーグの6段階の道徳性発達の3段階目（いわゆる「よい子ちゃん志向」）にとどまる者が少なくない。「先生からよく見られるためにも規則に従っている」

(21.8%→27.7%→40.7%)と先生によく見られることを意識する割合が近年、急激に増加している。主体性や目的意識についての質問でも、「授業がきっかけとなって、さらにくわしいことを知りたくなることがある」

(58.6%→47.9%→51.3%)といった主体的な、あるいは内発的動機付けに基づいた学習への取り組みは97年に低下したままとなっている。また、大学進学についても「とりあえず進学」や「どこでも進学」が広がり、目的意識が希薄化し、「将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい」

(97年38.7%→09年40.1%:79年は質問項目無し)が4割に達している。高校生の進路意識は夢を与えると夢しか見ない（夢追い型進路指導の弊害）、手をこまねいていると意識が希薄化する。今、高校では宿題だけでなく土曜授業や週末課題が広まっている。学校の引いたレールの上で勉強させ、しかも脱線しないように個別的に勉強面・精神面のケアを行っている。そのことが生徒を依存的にし、依存的だからますます指導をするという悪循環が起きている（個別主義的面倒見主義の弊害）。

(6) 学校ランクと社会階層の関連が強まった。

表1にあるように、79年には普通科上位校の生徒の社会的背景は多様であった。大卒・専門管理は26.0%、非大卒・専門管理は

18.7%でこれらを合計しても 44.7%と半数未満であった。家庭的背景による偏りが小さく、多様な背景の生徒の出合いと切磋琢磨があるし、競争の公正性が保証されていた。これに対して 09 年では大卒・専門管理は 50.9%と 5 割に達し、これに非大卒・専門管理を加えると 62.4%、およそ 3 分の 2 に達する。

表 1. 普通科上位校の父親の学歴と職業

	父学歴	専門・管理	事務・販売	農林・自営	労務
79年	大卒	26.0	5.6	2.0	1.7
	非大卒	18.7	17.3	11.7	17.0
09年	大卒	50.9	11.0	2.3	5.5
	非大卒	11.5	6.4	4.1	8.3

※数字(%)はその年度・ランク全体の中での%。

このような社会階層の偏りは、1. 高校時代という多感期に生徒が多様な友人と出会う機会を奪っている。2. 競争の公正性を奪い、競争への動機付けと競争の結果の妥当性・正当性を弱める。3. 競争の活力を奪う。4. 出自を問わない能力主義の競争が影をひそめ、庇護移動 (sponsored mobility) の原理が強まり、その結果より多くの庇護が投入されざるを得ず、教育の階層格差拡大と生徒の依存傾向の強化との加速に帰結する。

【新自由主義の台頭】

「大きな政府」的な生徒の多様化への対応は財政面で限度がある。そこで市場的な競争力や民間の活力を使って、学力向上や教育の活性化をはかろうという考えが台頭してきた。新自由主義の台頭である。しかし、今日では新自由主義は「制度改革」を超えて「指導・実践の改革」を企てている。その方法として高校現場では学校や教員の主体性を奪い、学校や教師を「代理人」として位置づけ、指導・実践面で政府（や教育委員会）の意向に沿うように強制する「新しい統治」が浸透し始めている。学校や教師の代理人化による新しい統治の導入を行うために主幹教諭、職員会議の伝達機関化、学校評価制度、教員免許更新制などが導入されたと言われている。

政府や社会は、「新しい統治」によって競争促進、とりわけ教育的なものを数値化することによる競争促進を推し進めようとした。

【新自由主義の現状】

“教師”は“代理人”に変容し、生徒は数値化されやせ細った学習を行うようになってしまったのだろうか。

われわれの調査では、高校教育の指導・実践の場では、必ずしも新自由主義は優勢ではない。伝統的な“教育観”が健在である。表 1 で教員調査の結果、教師は「代理人」であるよりも前に、「教育者」の顔を見せていた。教師は「政治的、社会的関心のすすんでいる生徒」や「勉強はできないが生活力の旺盛な

生徒」などのリベラリズム的価値（＝共同体的価値や人間的価値）を大切にしていた。

しかし、表 1 に見るように、新自由主義の陰が徐々に忍び寄っている。同じ表で「授業中、納得するまで自分の意見をひっこめない生徒」や「学校に対して、不満や意見を堂々と主張する生徒」を好ましいと答える割合が減少している。また、「試験の勉強はよくやるが消極的な生徒」「よく勉強するが、テストの点数や席次にこだわる生徒」を好ましいとする割合が増加している。

表 1 教師の生徒観（好ましき）

質問項目（生徒タイプ）	調査年		
	1979年	1997年	2009年
	604人	524人	515人
政治的、社会的関心のすすんでいる生徒	71.9	91.1	90.6
勉強はできないが生活力の旺盛な生徒	88.2	91.9	90.0
授業中、納得するまで自分の意見をひっこめない生徒	63.7	63.5	43.8
学校に対して、不満や意見を堂々と主張する生徒	77.3	77.6	57.7
試験の勉強はよくやるが消極的な生徒	15.2	19.6	30.2
よく勉強するが、テストの点数や席次にこだわる生徒	17.1	29.8	39.0

注) 数値(%)は、「好ましいと思う」「どちらかといえば好ましいと思う」と答えた合計。無回答を除いて計算してある。

表 2. 生徒の授業観・社会観 (%)

	調査年		
	1979年	1997年	2009年
	1375人	1375人	1375人
いまの日本の社会では、学校での成績によって将来が決まる	78.0	78.1	65.1
学校では勉強のできる生徒が幅をきかせている	29.4	29.9	50.5
勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損をするのはしかたないことだ	59.5	57.9	74.2
高校での勉強は、将来、職業や生活に役立つ	42.3	39.8	60.9

次に生徒への質問から、生徒の中での新自由主義的授業観・社会観の台頭の様子を見てみよう。表 2 で生徒はこの 10 年間で意識が大きく変わっている。「いまの日本の社会では、学校での成績によって将来が決まる」が減り生徒のメリトクラシー規範意識は弱まりつつある。これに対して、「学校では勉強のできる生徒が幅をきかせている」や「勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損をするのはしかたないことだ」が増えており、新自由主義的競争の雰囲気広がっている可能性を示している。また、「高校での勉強は、将来、職業や生活に役立つ」と学習内容の効用感が強まっている。

われわれの調査結果は、高校では教師の間では共同体的、人間性重視的な教育観を保持するものの、徐々に新自由主義的な教育観が広まりつつある可能性を示している。これに対して、教師のまなざしとは異なるところで、生徒は急激にメリトクラシー規範が弛緩して代わりに新自由主義的な学習観が台頭していることを示している。

今、進捗しつつある新自由主義的教育実践は教育を活性化するきっかけになるだろう。しかし、人間的成長や共同体的感覚などの教育的なものや文化的なものが数値的、競争的なものに置き換えられるという負の側面は深刻化しており、その進行は食い止めなければならない。

【シンガポール生徒調査】

(1) 父親の大学・大学院卒率は、日本の高校では、上位校=61.9%、中位校=39.4%、専門校=17.6%であり、上位トラックほど社会階層が高い。一方で、シンガポールにおける各高校の父親の大学・大学院卒率は、JC1=55.7%、JC2=26.4%、ITE=5.2%となっており、シンガポールでも上位トラックほど社会階層の高い生徒が所属している。このように、日本・シンガポールともに所属トラックと社会階層という点では、決してメリトクラティックであるとはいえないことがわかる。つまり、高校トラックを経由した社会階層の固定化ないし再生産のメカニズムの一端が垣間見られるということである。

(2) メリトクラシーと進学期待についてシンガポールでは、高校ランクによって親の進学期待に差があるものの、日本とは異なり、同一高校ランク内での出身階層（父学歴）差は見られない。両国とも、もっとも選抜度が低いとされる高校において、大学進学を希望する者の比率が相対的に低いことは確かであるが、しかしながら、日本の生徒は親の進学期待やその背景にある出身階層と強く関連する傾向がうかがえるのに対してシンガポールのITEではそのような傾向は確認されず、一方で生徒本人の学業成績や親の進学期待が関連している。ここから、選抜度が低いとされる高校においても、シンガポールではメリトクラシーの理念が徹底されている一出身階層に左右されることなく、生徒本人の学業成績や重要な他者である親の進学期待が、生徒のアスピレーションを形成している一といえるのではないか。

(3) シンガポールの多様化への対応—マンパワー政策と分岐型教育体系シンガポールでは私立が少ないという点で、日本よりも国家による教育管理が容易である。そうした有利さを背景にシンガポールでは産業界のニーズにあった人材養成である

マンパワー政策が計画的に実施されている。マンパワー政策を容易にするために採用されたのが分岐型教育体系である。シンガポールでは分岐型教育体系がとられており、アカデミックなトラックでは学歴資格が地位達成を保証し、非アカデミックなトラックでは、即戦力的な職業資格が職業的達成を保証している。シンガポールでは、上位校ではエリート教育を丁寧に行う。下位校ではhands-onの職能教育を丁寧に行う。高校内の多様化圧力を減じた上で行う丁寧な分岐型教育は成功していて、生徒は教師の期待に対しても肯定的に反応する。また、中位校とITEの生徒は日本のカウンターパートよりも学習時間が長い。

(4) 日本とシンガポールの生徒と教師の比較結果では、分岐型の高校教育のシンガポールでは学習の奨励においては顕著な成果を上げていることが分かった。しかし、高校生の「いまここ」志向が弱い。あるいは教員の生徒観で「生活力の旺盛さ」や「自分の意見を大切にすゝる行為」を望ましいとする割合が低い。また「成績へのこだわり」を望ましいとする割合が高いことなどが分かった。こうした結果は、日本の単線型教育体系の長所を再発見させるものであった。職業生活・大学生活との接続が良いことを求めるあまり、あるいは多様化の煩雑さから逃れたいあまりに日本の高校教育が大切にしてきた「生活力」「意見の主張」「成績にこだわらない」「いまここを大切にすゝる」などの教育的価値を見失ってはならない。シンガポールの分岐型の高校教育は、強固なメリトクラシー規範、必死の生き残り戦略、小国でかつ私学が少ないゆゑに容易な計画的なマンパワー政策などといった背景の中で作られたものである。日本の高校教育の背景はシンガポールのそれとは大きく異なる。日本社会では「生活力」「意見の主張」「成績にこだわらない」「いまここを大切にすゝる」などの教育的価値を求める傾向も強い”。このような観点からは、多様化のニーズが高まる中で、シンガポールのような分岐型の教育体系を取るのではなく単線型教育体系を堅持した上で、卒業後の進路との高いレリバンスなどの分岐型教育体系の要素を“良いとこ取り”する方策を模索することが求められる。

【シンガポール教師調査】

(1) 「全体で問題を受け止めようとする雰囲気がある」及び「自分の仕事が正当に評価されていると感じる」と答えた教師の割合は、学校ランクには関係がなく、またどちらもシンガポールのほうが肯定率が高い。

(2) 日本の教師は「教師としての自分の能力に自信がもてない」と回答した教師の割合

がシンガポールより高いのとは逆に、「教師としての力を高めるために自分は学び続けている」と答えた教師の割合はシンガポールよりも低い。さらに、「教師は、社会の人々から尊敬されている仕事である」と思っている日本教師の割合がシンガポールの半分程度にとどまっているだけでなく、「自国の高校教育は良い方向に向かっている」と答えた日本教師の割合も、シンガポールに比べるとはるかに低い。

(3) 両国ともほとんどの教師が「自分は教師になってよかった」や「教師は、使命感がなければやっていけない仕事である」と思っている。一方で、「仕事上で強いストレスを感じる」と答えた教師の割合は両国ともに5~6割程度で、またその割合がシンガポールでは学校ランクによる差異が見られないのに対して、日本においては上位校と下位校で開きがある。

(4) 両国の教師達にストレスをもたらす要因に違いがあった。教師のストレスを規定する要因として、日本の場合では「下位校ダミー」が有意な効果を持つものに対して、シンガポールでは学校ランクによる影響はみられない。日本では、ほかの要因を統制した後も上位校の教師よりも下位校の教師のほうが仕事上で強いストレスを感じる確率が2倍近く高くなる。一方、シンガポールの場合では40歳以上の教師が40歳以下の若い教師よりストレスを感じるのに対して、日本ではそのような傾向はみられない。シンガポールでは「ティーチング・トラック」というキャリアルートを選び、教職を長年続けてきた経験と力量を求められるベテラン教師のほうが仕事上で強いストレスを感じる確率が1.6倍以上高いことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

① 樋田大二郎・中西啓喜・岡部悟志「単線型メリトクラシーパラダイムの再考・第2次報告—シンガポールとの高校生文化比較研究(1)」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読無、第3号、1-22頁。

② 樋田大二郎・シム・チュン・キャット・金子真理子「単線型メリトクラシーパラダイムの再考・第2次報告—シンガポールとの高校生文化比較研究(2)」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読無、第3号、23-44頁。

③ 樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(1)」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読無、第2号、1-22頁。

④ 樋田大二郎・大多和直樹・金子真理子・岡

部悟志・堀健志「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(1)」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読無、第2号、23-44頁。

[学会発表] (計 3 件)

① 中西啓喜・岡部悟志・樋田大二郎「高校多様化の課題についての国際比較研究—シンガポールとの比較から。高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)より—」、日本教育社会学会第61回大会、2011/9/24、お茶の水女子大学。

② 樋田大二郎、「高校教育の環境変化と動向前提の変動、多様化の潮流と新自由主義の潮流」、平成23年度 青森県高等学校教育研究会 地理歴史科公民科部会研究大会(招待講演)、2011年8月17日、木造高等学校。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋田 大二郎(HIDA DAIJIRO)

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：80181098

(2) 研究分担者

岩木 秀夫(IWAKI HIDEO)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：90114389

耳塚 寛明(MIMIZUKA HIROAKI)

お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：40143333

大多和 直樹(OTAWA NAOKI)

東京大学・大学総合教育研究センター・助教

研究者番号：60302600

金子 真理子(KANEKO MARIKO)

東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センター・准教授

研究者番号：70334464

堀 健志(HORI TAKESHI)

上越教育大学大学院・学校教育研究科・准教授

研究者番号：10361601

岡部 悟志(OKABE SATOSHI)

ベネッセコーポレーション・ベネッセ教育研究開発センター・教育研究部・研究員

研究者番号：70416832